

# がん切除から5年の節目

## がん社会 を診る

中川 恵一

膀胱(ぼつこう)がんを「自己超音波検査」で見出し、切除を受けてから明日で5年になります。

がんは臓器の表面を覆う「上皮」から発生します。上皮は外界と体との境界で、異物や病原体などの侵入を防ぐ、防波堤としての役割を持ちます。膀胱の上皮は尿道を介して外界につながっています。胃の上皮も大腸の上皮も、口や肛門を通して体の外とつながっています。上皮細胞は恒常的にダメージを受ける宿命

にあり、がん化のリスクを負っていると言えるでしょう。

私はアルバイト先の当直室にあった超音波装置を使って、15歳の膀胱がんを発見しました。上皮にとどまる「上皮内がん」でしたから、2018年の12月28日に内視鏡切除を受け、大みそかに退院、新年の1月4日から通常勤務に戻りました。もし、がんが膀胱上皮の下の筋肉の層にまで広がっていたら、膀胱全摘となっていたはずでした。

膀胱がんのリスクを高める要因として分かっているのは喫煙のみ。たばこを吸わない私が罹患(りかん)したのは「運が悪かった」ためでしょうか。言いようがありません。

がんの治療率のメドとして5年生存率が使われます。胃がんや大腸がんなど多くのがんは、5年以降の再発が少ないためです。治療から5年となる日に祝杯を上げる患者も少なくありません。

一方で、5年以降に再発するがんも珍しくありません。乳がんや肝臓がんのほか、膀胱がんも再発しやすいです。私も来年の1月に5年目の膀胱内視鏡検査を受けますが、以降も定期チェックを欠かさないつもりです。

日本人女性に一番多い乳がん(9人に1人が罹患します)の場合、20年もたってから再発した患者を何人も診てきま

した。「そよ風の誘惑」などのヒット曲で知られる歌手、オリビア・ニュートン・ジョンは乳がんの治療から25年後に再発、昨年亡くなっています。診断から30年以上が経過していました。私も、治療から34年後に元の場所から再発した乳がん患者の治療を担当したことがあります。

厳密に言えば、がんには完治という概念はありません。結核やインフルエンザなどの感染症は、体内の細菌やウイルスの数がゼロになれば完治と言えますが、がんの場合は微小な病巣が体内に残っていないとは言えません。そもそも、がん細胞は新たに毎日多数発生しています。

がんのやっかいな点の一つが、治療後も長い間再発のリスクを抱え、完全には安心しきれないことです。禁煙や運動などで再発のリスクを下げる方策が大切になります。私も運動と筋トレを続け、定期的な検査を欠かさないつもりです。(東京大学特任教授)

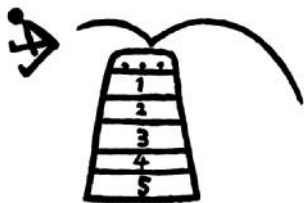


イラスト 中村 久美